

学校名：東永谷中学校

担当教科：英語

氏名：白浜 千春

1. 今回の研修における目的やねらい

「今をどう生きるのか」というテーマをもち、自分の向き合っている生徒が意欲をもって学ぶ動機づけになるような授業、彼らの心に響くような授業ができないか模索していた。ふと目にとまった教師海外研修の応募用紙を見て勢いで参加した為、開発教育というものに出会ったのは事前研修が初めてだった。この事前研修を通して自分の中で漠然としていた目的が形になってきた。それは1度の授業で答えが出なくてもいいから、意見を尊重し合い、共に考えることの過程を大切にできる場を学校教育の現場で実践したいというものだ。この研修では、実際に、政府規模のものから Nongovernment のものまで、多様な支援の現場を自分の目で視察することが出来る。それだけではなく、個人個人の交流も積極的にすれば、生活や文化などの面からもこの研修で沢山の事を学ぶことができるのではないかと。自分自身がまずその現場を経験したうえで授業に生かしたいという思いが強かった。

2. 目的やねらいがどのくらい達成されたか

教育改善の現場では、多くの問題点を知った。教育の質を改善させたいというのは、大人から子どもまで、多くの人願っていることであり、どんな環境にいても目を輝かせながら懸命に希望を語る様子を肌で感じる事が出来た。様々な場所を訪問していくうちに、複雑につながるこの国の問題点や負の部分に対してあれこれと疑問が渦巻いていた。そんな時に訪問した日本友好学園の子どもの笑顔に迎えられ、インタビューや交流会をする中で、日本の子どももカンボジアの子どもも変わりなく悩んだり希望をもったりして将来のことを考えているのではないかと、とスッと点と点が線で繋がったような瞬間があった。自助努力を促す支援者たちの思いと、国のため自分の家族のために努力するカンボジアの人々。一人一人の出会いが、私にとってはとても大きかった。カンボジアに対して持っていた先入観にとらわれずに受け止められた。どれも多様性があり正解は1つではなく色々あっていいということを感じ取れたことが、目的としていた思いと重なったのではないと思う。

3. カンボジア国から学んだこと

カンボジアを訪問する2日前に、元トゥールスレン虐殺博物館の館長をしていた方の裁判が日本でもニュースになっていた。研修の始めにそのトゥールスレン博物館を訪問した。細かい経緯や心理的なことは触れられず、事実のみを並べた展示であった。この国にはまだ内戦による多くの傷跡が残されていて、その一番は国を支えるべき人材がことごとく失われたという事なのだと、その後の訪問する先々で感じ取れた。

また、教育の現場で起きている問題については、教員養成校の教諭の話の中では少しずつ改善されているが、教員の給料が低いことが最大の問題だと言っていた。副業を強いられ、まともに授業へ取り組めていない、また教室に80人近くの生徒がいて教科書を5人で1冊使っているところもあるなど、ハード面でもソフト面でも支援に頼らなければ改善できない現状があった。一方で、電気の通っていない学校へ贈られた電子ピアノが、使い方もわからず箱に入ったまま山積みになっていたことや、他国から

の支援が入っている学校とそうでない学校の間で起きる摩擦があるということ。援助側の間にドナーを交えて年に2回話し合いを行っているということから、支援する側としても実態に合わせてどのような支援が必要とされているのか、またどのようになって欲しいのか相互に理解し合った上でこそ、支援する意味があるのだとわかった。

そして未だに目に焼き付いているのは、地平線まで広がる美しい田園風景、子どもたちの笑顔、壮大な遺跡群の風景である。インタビューをした子が、「カンボジアは発展途上国ですが、この美しい国に住んでいて幸せです。」「宝物は家族と、沢山の親戚と国です。」と答えるのを聞いて、そういったものも豊かさなのだと、物質的な物で豊かさを感じる自分の価値観を見つめ直した。

4. 今回の研修経験をどのように教育活動に活用しようと思っているか

カンボジアに私が行くと言うだけで、地雷に気を付けて！などと声をかけてくる生徒が多数いたので、その凝り固まったイメージを覆すような授業をしたい。カンボジア人と日本人というくくりではなく、カンボジアに暮らす魅力的な個々人を紹介していきたい。訪問した先は、とても充実していて、どれも子どもに伝えたいという内容が盛りだくさんである。自分の中で整理して準備しなければ焦点が定まらなくなってしまいそうである。まずは英語の授業で、カンボジアの子どもたちに夢についてインタビューした内容を紹介したい。堂々と英語で夢を語れる楽しさを感じられるようにしたい。また道徳や学活などを始め全ての教育活動の中で、話し合い、学び合いの場を設け、多文化共生というものについて考えていくきっかけにしたい。

5. 今回の研修に参加してよかったことや、よりよくするための提案

事前研修の内容がとても深くそのおかげで開発教育の足がかりをつかめた。これまでの自分の国際理解の授業の内容を改めようと思った。カンボジアでの訪問先も、いろいろな狙いをもって計画されていることが伝わるものだった。それぞれの思いをもってカンボジアで援助活動に取り組んでいる方々の様子をほんの少しの時間でも実際に訪問して窺い知れたことは、自分一人では決して実現できない貴重な体験だった。それだけではなく研修の訪問先以外でも、異校種の集まりの参加者の方々との話や JICA 同行者、通訳兼ガイドさんと移動中や食事中に話すこともとても為になることばかりだった。参加者の質問1つにしても、様々な視点からの切り口があるので、勉強になることばかりであった。このような機会には、なかなかめぐり合えないが、より多くの教職員に知ってほしいと思った。

本当にこの研修に参加させてもらえて、この上なく嬉しい。

6. その他研修全般を通じての感想・意見など

健康面や安全面ではとても気を遣っていただき、安心して過ごすことが出来た。細やかな気遣いのおかげで途上国にいるという不安はなく、研修の内容に集中することが出来たと思う。

7. 今後の本研修参加者へのアドバイス等

研修前に役に立ったことは映画（キリングフィールドと地雷を踏んだらサヨウナラ）と本（殺戮荒野からの生還やガイドブック）等でその国の情報を知りながら期待感を高めることだった。カンボジアでの研修中は、10日間慣れない環境の中で過ごすため、まずは体調管理をしっかり気を付けることが一

番大切なことだと思った。特に飲料水には気を付けていた。又、心に余裕をもって何事も柔軟に受け入れる姿勢を持つと、より充実した研修になると思う。カルチャーショックを受けることがあっても、参加者と話しているうちに反芻しながらでも消化でき、納得できるときがくるので、ため込まずに分かち合うことも大切だと感じた。こちらの研修に臨む姿勢が、そのまま実践授業に反映されると思うので楽しもうという前向きな姿勢を持ち参加してほしい。